

俺妹　ロールキャベツ  
系男子　高坂京介

白銀 響

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もし、高坂京介がロールキャベツ系男子だったらという話です、

見た目 草食系

中身 肉食系

日常中心に書きます。

# 目次

この男、高坂京介

1



## この男、高坂京介

回りから音が徐々に消え始める。

木が風に揺られる音。車の排気音。遂には自分の呼吸音さえも聞こえなくなる。

しかし、目の前にいるバケモノ、もとい俺の親父が発する音は反比例するが如く大きくなる。

息を吸う音、血が脈動する音。

相手の一切の初動を見逃さないように目を見開く。

俺と親父の間は約2 m強。

どちらにとつても必殺の間合い。

互いに手の内がバレている以上、相手の思考を読み間違え他方が必然的に負ける。

(・・・ふう、ままならねえな。)

このような場合は基本集中が切れた奴が負ける。

この緊張感に焦って初手を放てば、受け流され一撃を貰う。

集中力を磨耗すれば、それだけに初動に気付かなくなる。

俺が親父に勝てるとすれば、若さの一点だろう。

この緊張感を保てる体力がある以上、俺から動き出すのは愚の骨頂だ。

一瞬が数分、数分が数時間に感じるこの空間も唐突に終わりを告げる。

(つち、汗が・・・!?)

額から流れた汗が目に入り、瞬きする間にバケモノは動き出した。

(結局後手になんのかよ・・・!)

思考する暇もなく俺は親父が繰り出した右拳に遅れるタイミングで左拳をクロスカウンター気味に放った。

(親父のリーチは俺と比べて拳半分短い、更に俺は肩を伸せてるから相討ちにはなんねえなあ!!)

刹那の思考を担保に迷わず、左拳を親父の右頬にめり込ませた。

・・・はず、だった。

しかし、事実と反し俺の拳は親父の右頬数cmを手前にして動きを停止した。

(つくそ、親父は何をしやがったって、マジかよ!? つぐはあ!!)

俺の意識が刈り取られる寸前見えたのは、俺の左クロスに合わせるように、親父が右肘で軌道を反らしながら俺の左頬に拳をめり込ませる親父だった。

(なんで、親父が、ブラッディ・クロス……)

タネが解つても後の祭り。

俺の意識はそこでブラックアウトした。

「つてててて、おい、親父。」

「ああ、なんだ京介。後今は修行中だから、親父じゃなくて師匠だ。」

「はいはい、じゃあお師匠さんよ。なんであんたがボクシング漫画のネタを知ってるんだよー！」

不満そうな顔をしつつ、顔を冷やしながら俺は聞いた。

「ん？ ああ、これか。これは少し前の事件でな、居酒屋で酔った客がいたんだがコイツがプロボクサーで、周りの客と喧嘩をし始めたんだよ。」

親父はそう言うのとタオルを俺に投げて寄越した。

まあ、有り難く受け取っておいた。

「俺も止めようとしたんだが相手が中々いいパンチを俺にくれやがってな。そのときにプチンと来て、相手のパンチにクロス気味で合わせた時に偶然肘で相手の軌道が反れたんだよ。」

言い終わると親父はペットボトルに入った水で喉を潤した。

(マジかよ、このバケモン。自分で編み出したとか。)

聞き終わると、俺はすつと立ち上がり帰宅の準備をした。

「京介、家に帰ったらしつかりと冷やしておくんだぞ。寸土目しようにもお前のパンチに気圧されて本気で殴ってしまったな、すまん。」

「へいへい、かすつてもねえのに要らぬお世辞は良いよ。飯は食って帰んの？」

「いや、家で食べるさ。母さんに宜しく言っといてくれ。」

「分かったよ。」

俺は週に三回親父から虐待じみた稽古を受けている。

息子には強く逞しく育ててほしいという親父の願いから物心付いた頃には何かしらの武術武道を教えられていた。

今となってはもう慣れたし、小中学生では県や全国大会にも出れた。

そこまで嫌じゃなかったし、やりがいも感じた。

まあ、柔道で反射的に相手を殴った時は幾らなんでも今のルールに合わせると監督から怒られたし、親父からお前は総合格闘技部でも創れと笑われた。

「ただいまつと。なんだ桐乃も帰ってんのか。また靴を脱ぎ散らかしやがって。」

自分の靴を揃えるついでに桐乃の分も揃える。

手洗いうがいをし終え、リビングのドアを開けようとする中から妹の桐乃の声が聞こえた。